

まちづくりネットワークえひめ



たうん

Vol. **89**
2006.7

特集

地域の
自立とは
なにか！





■表紙のことは

「あの高い所に住む人がいるの」と景色なら見て終わる、山の上の又山に、主を待つ桜の木が、今花を咲かせている。

登り着いた「あらし山山荘」。主が申すこの「あらし山」とは、荒れたる山か、京の嵐山なのか、どうも後者が正解のようで、花咲かじいさんをしているそうだ。

仙人は霞を食べて暮らすと言いますが、主もここで匂をつまんで、いい空気を吸って長生きをするのか、向かいの山から草刈りの音まで昼時の眠気を誘う心地良さ。



柳原あや子

●プロローグ

豊かさと幸福を問いなおす

1

(財)えひめ地域政策研究センター 清水 和繁

特集／地域の自立とはなにか！

●ミニトーク

何もない村に人が来る！

2

ゆっくりと風を感じられる地域を創出

馬路村(高知県)／東谷 望史

町をいろどりで公園化、

5

気を育てる仕組みで地域資源産業創出！

上勝町(徳島県)／横石 知二

直売で元気に、

8

情報が育てたマーケティングの意識

内子町(愛媛県)／森本 純一

オンリーワンの地域づくり、

11

かけがえのない地域資源を活かす！

双海町(愛媛県)／若松 進一

●トークバトル

徹底討論「地域の自立とはなにか！」

14

●論 談

地域自立の処方箋

20

朝日新聞松山総局／砂場 隆浩

●トークナウ

トークバトル放課後サロン

22

●人・夢・地域

街道から地域を考える～心の桃源郷を求めて～

24

とうほく街道会議事務局／島谷留美子

●MY TOWN うおっちゃんぐ

自立する像たち・旧大洲市の場合

26

タウンツーリズム講座／岡崎 直司

●Information

話題のニュー・スポット

28

センターからのお知らせ

29

ブックインフォメーション

29

豊かさと幸福を 問いなおす

——地域課題研究サロン「地域の自立とはなにか!」

(助えひめ地域政策研究センター研究員 清水 和繁)



ステイグ・クレツソンという人が書いた一編の詩との出会いが、今回の研究サロンを企画するきっかけとなった。テーマは「地域の自立とはなにか!」。戦後の高度経済成長を経て、私達の生活は豊かになり、食べるものに困らずなんでも手に入るようになった。しかし、都会と田舎の格差は広がる一方で、先人が営々と守り築いた小さな田畑や山は荒れ続け、自然豊かな地方はいつの間にか消え去ろうとしている。そして大量生産・大量消費の時代のなかで、地域にあつた暮らしや食は変貌した。本当に豊かな生活、豊かな地域になったのだろうか、私たちは本当に幸せになったのだろうか。

さらにグローバル化の波は容赦なく地方や個人に押し寄せている。社会は成熟し価値観や欲求が大きく変わり、長寿・高度情報化社会の到来など社会の構造的な変化が顕著になった。地域が自立し生き残るためには、変革を主体的におこな

い、自ら変化をつくりださなければならぬ。地方こそ、新しい発想や運動を生み出す力を秘めている。田舎は自然のリズムと調和をしており、時間がゆったり流れるので、都会よりもはるかに息の長い取り組みが可能だ。そして、どれだけ労力と費用をつぎ込もうと、つくり直せないものがある。それは人々の心のネットワークだ。日々の暮らしの長い時間の積み重ねで、紡がれてきた目に見えない地域の心の財産である。そこには地域の香りがある。

グローバル化は、一方でこの小さな地域の特性が重要な役割を担う傾向を強めると考えられ、地域が自立するには「個」が自立することが必要で経済的な自立がともなう。地域の主たる産業である第一次産業は、どの国でも生産者が一番弱く、中間どころがリスクを負わずに最も多くの利益をあげ基盤が脆弱である。この現状を打開するために、それぞれの地域にある自然や歴史など、人のネットワークや役割も含め、その価値を再認識し再発見する必要がある。受け継いだ風土や文化を基本に、新たなものを創造していくことが、地域資源産業を創出す

ることではないか。さらにIT化によりコミュニケーションコストが非常に安くなった。自立するためには、これらを上手に利用し、情報を使つてものごとをなすとげるという情報リテラシーをさらに高めなければならぬ。

研究サロンでは、四国を代表する地域アントレプレナーである、東谷さん(馬路)、横石さん(上勝)、森本さん(内子)、若松さん(双海)が一同に会し、三百名の参加者とともに熱い議論を交わした。彼らは互いにネットワークを持ち影響しあっている。いまや地域の課題解決は研究者の提言型から、身近な場所ですまざまな「連携」「協働」「参加」の形で成し遂げる時代に来ている。これらの地域づくりは、「在地」の自覚と認識が必要であろう。

今回の舞たうんは、今年二月に開催した、この地域課題研究サロンの内容を集めた。彼らが模索し実践した道筋をたどりながら、地域が自立するとはどういうことか、それぞれの答えが見つければ幸いである。地域をローカルな視点で組み立てなおそう。新しい世界は、そこから見えてくるかもしれない。

何もない村に人が来る！ ゆつくりと風を 感じられる地域を創出

豊かさの終着点

新聞で次のような記事を読みました。
「戦後、多くの人々が豊かな生活、豊かな地域、豊かな国をつくろうとして働き続けた。しかし、ふと立ち止まって周りを見回すと、効率をキーワードに、確かに便利にはなったが、山は荒れ、先人が営々と築いた小さな田畑は次々と消えていた。富が集積したはずの中央は水や空気が汚染され、自然豊かな地方はいつの間にか非効率と指弾されている。我々が追い求めた豊かさの終着点が、これなのだろうか」。この三十年間で、農山漁村から六百万人の人が消えていきました。高知県の山間地域でもかなり村が消滅をしました。

私は「ユズを売る」という活動から始めましたが、だんだんユズを売るだけでなく「地域をどう創っていくか」ということを考えるようになってきました。農

馬路村農業協同組合 代表理事組合長

東 谷 望 史



協は地域の組合員がお金を出し合って結成したものですから、自分たちの暮らしや地域を良くしていく組織でなければなりません。しかし、多くの農協がそういう地域づくりに参加をしていないか、もしくは、できていないように感じています。

龍馬に背中をおされて

私が、馬路村農協に入ったのは昭和四十八年です。馬路村は面積の九十六%が山林で農地は少なく、中心産業は林業でした。農協に入ってみただけで出番がない。この地域でどんな農業を展開すればいいのかという知恵もなく、悩み、入る所を間違ったと思ったんです。そんな時に夢に出てきたのが坂本龍馬です。

「おんしゃあ、何言いよるか。おんしゃの生まれた時代にも、おんしゃも、何ぞすることがあるろがや」

尊敬する龍馬に夢の中で気合いを入れられたんです。これが自分の中に後々までずうっと残っています。繰り返しになります、各人が



生まれてきたそれぞれの時代には、それぞれ役目がある。それを自分自身で見つけ、前に進んでいく。このことが何よりも大切と思うようになりました。この夢から、私のすべてが始まったように思っています。

以来、ずっと続けてきたことが、ユズを売り、ユズの市場をつくるということです。農協には、マーケティングの考え方や経験がありません。ですから、東京や大阪に足を運びながら、お客さんの変化や、販売方法を自分たちで見つけることで試行錯誤が続きました。どうすれば将来へ繋いでいける売り方ができるのかを見つけるまでには時間がかかりました。

まずやったことは、自分たちで商品をトラックに積み、夜も寝ずに運転して、朝、都会に着いたら商品を並べて夕方まで売るということです。この経験を通して、少しずつ方向が見え始めてきました。当時、商品はユズの搾り汁だけでした。私たちの地域ではユズの搾り汁は多く料理にかけて食べる欠かせない食材ですが、東京以北では、ほとんど使われない食材でした。「手軽に食べることができるといいう方向



に商品開発をしなければならないと気がつきました。しかし、農協では高額の投資をして農産物を加工し、うまく売っていった事例が非常に少ない。ですから、理事会に私たちが提案をしても、なかなか受け入れてもらえませんでした。これが自分にとっては、最初に行く手を遮った高い壁でした。この壁を一つ越えたら、次の壁がまた出てきて、この二十余年りは、そんな壁を越える努力をずうっと続けてきたように思います。お陰で今では、働く場ができて、多くの人が一年を通してユズの加工や販売に携わるようになりました。



今では、村内から雇用するだけでなく、村外からも農協職員を公募していき、馬路村で働こうというのですから、やる気が全然違う。人間は目的意識を持たねばだめです。新しい人が村に来たことで、村中すごい刺激を受けました。そして、村が変わり始めました。今の馬路村はそんな状況です。



ゆっくり時間が流れるユズの森

私はユズを売っているうちに、地域を売らねばならないと思うようになりました。ユズを売るより村を売る。村の人を売る。そういう方向で進んだ方が他地域と差別化できると感じています。店頭に並んだ商品をお客さんが手に取った時、馬路村にどんなイメージを持ってくれるかということが大切だと思ふようになりました。

東京や大阪のまちづくりを後から追っけていても、私たちの村は絶対にかないません。「ゆっくりできる」「村の風を感じて欲しい」。そんな情報を発信し、そういう環境をつくりたいと

考えた結果が「ゆずの森構想」です。建物も古くなっても価値があり、しかも、田舎に似合うものという視点で設計しました。地域を売るには、商品を生産するだけではなく、見た目も必要です。ですから、木で作ることにこだわりました。「時間がゆっくり流れる」という課題は、北海道にある「ニングルテラス」という倉本聰さんが見つけた小さな店を見

て、黒川温泉を変えたと言われる後藤哲也さんの話を聞き、ヒントを得ました。後藤哲也さんたちに習ったことは「わあ、すごい」という言葉を、どれだけ多くのお客さんに言ってもらえるかが勝負だということでした。

ユズを売るといふ活動から、試行錯誤を重ねた結果、迷いはありましたが、人口が少なく観光地でもない小さな村でもできる地域づくりの方向が見えてきました。人口が少なくても元気に生きて、都市に情報を発信して、都会の人に來てもらって、そして、私たちのユズも売れる。この方向に向かってこれからも歩んでいきます。

ホームページ

<http://www.yuzu.or.jp/>



町をいろどりで公園化、 気を育てる仕組みで 地域資源産業創出

染みついていた負け意識

上勝町で二十六年お世話になっていますが、私は上勝の人間ではありません。徳島市で生まれました。当時の町長と農協組合長が相談して、「地元の人間は甘えがあるから大きな事業はできない、絶対によその者でなかったらあかん」と議会や住民を説得して採用してくれたそうです。

ですが、行ってみて本当に驚きました。とにかく朝から酒を飲む人がよくおる。集まったら役場や農協の悪口ばかり。お母さんたちまで「私は沢庵食べて貧乏しても、子どもたちは東京の大学に行かせて、大企業に就職させる」というんです。経済基盤が弱く、何をやっても都会には勝てないという負け意識が体に染みついていたんです。田舎ってあかんのやなあと実感しました。まず経済基盤をしっかりとつくることだと思ったわ



株式会社いろどり 代表取締役副社長

横 石 知 二

けです。軽自動車のパンを買って、徳島に農産物を運んで売るという行商からスタートしました。

いどり事業を創出

私は「自分がすることがある」ということが一番大事だと思っています。皆に認められる自分の出番があるからこそ、社会の中に存在感がある。子供だって、おばあちゃんやおじいちゃんだって、自分の存在感があつて、人に認められることは嬉しいことです。そんな地域にしたいと思つていたとこのことです。出張で行った大阪の寿司屋で、きれいな娘さんたちが「可愛いね」って何かをハンカチに包んで騒いでいるんです。顔から手元の方に目を移してみるとそこにあるのは、料理を飾つていた葉っぱです。うちの町には葉っぱは沢山あるし、「これ



やな！」と気がつき、絶対にいけるぞと思つて帰りました。早速、おばあちゃんたちを集めて「葉っぱを売ります」と宣言したら、「葉っぱをお金に変えることができるのはタヌキだけや」と取り合つてくれません。しかし、この環境の違いこそが絶対ビジネスになると思いスタートさせました。でも全然売れんです。そんな時に、上勝に来た料理人が私たちの葉っぱを見て「わしは使わん」とつぶやいたんです。よく考えたら、料理に葉っぱを飾る現場を見たことがない。教えてもらおうと料亭に行つたけれども門前払い。それで、お金を払つて客として料亭通いを始めました。お客になると大切にしてくれます。二年間、徳島、大阪、京都の料亭に通い詰める結果、調理場にも入れてもらえるようになりました。「どうやつてお使いになるんですか」「何がポイントですか」などと教えを請うているうちに、売れる葉っぱが頭の中に描けるようになり、売れるようになりました。

気を育てる仕組みづくり

私自身、うまくいったのは仕組みづくりだつたと思います。役場の防災無線を使った同報FAXシステムを導入しましたが、一斉にFAXを流すことができると、発注書を受け取るスピードはみ



な同じです。そして、早く連絡した人が受注できるんです。この公平さが重要です。次に高齢者専用パソコンをつくりました。町議会に説明したら「わしに使えないもんが、親に使えるか」と怒鳴られ、認めてくれません。でも、通産省が一億六百万円の事業予算を付けてくれて実現しました。上勝のおばあちゃんたちは、使えないどころか、今では十二分に使いこなしています。

この時、仕組みがなければ人を変えることができないことがわかりました。視察や研修会を繰り返しても、その場だけで終わってしまうんです。情報に接し、

自分で判断して行動する。この仕組みが、自分で考える習慣を上勝に育ててくれました。町全体でしているゴミゼロ宣言へもつながり、いろんなことに波及していったんだと思います。パソコンは情報を提供して、気を育てるんです。「気」というのが一番大切です。情報がパソコンという道具を通し、おばあちゃんの回りで渦を巻き始めています。おばあちゃんたちが毎日、「葉っぱで四千円稼ぐ」と「福祉サービスで四千



円使う」のでは、年中通して考えると、ようけ違います。うちのように人口の半分も高齢者がいたら、町としてももの凄いくことになるます。

しかも、この仕組みが、上勝に一体感をもたらししてくれました。自分が社会の中で生きている、自分がすべき仕事がある、そのことがモチベーションを上げます。そうしたことで個が磨かれ、全体の一体感が出てきます。その結果、上勝には地域のブランド力が出てきました。ゴミの分別にしても、三十五

にも分けます。それは面倒臭いですよ。でも、上勝は、こんな綺麗な環境だからこそ葉っぱが売れると思えるまで感性が磨かれていますので、自分のこととして行動できます。この一体感こそが上勝の強さなんです。

刺激与えるよそ者たち

外からドンドン人が入ってくるようになったことも上勝が元気になった一因です。全国からUターンで来た百二十八人が住んでいます。この人たちは地元の人たちよりはるかに熱心です。都会では得られない自分の存在感を求めて上勝

に来てからです。そんな彼らと接するうちに、地元の人の意識も変わってきました。そんなにたくさんの方が上勝は素敵だと来てくれるなら、出て行くのはちょっと待とうか思うようになったんです。今年は光ファイバーを七百戸に導入して、動画配信を始めます。この準備のためにおばあちゃんたちが開いている集会の名前は「光ファイバー戦略会議」。格好いいでしょう。動画配信で、情報はさらに渦をまき、気をもっともつと高めてくれるでしょう。

ホームページ

<http://www.irodori.co.jp/>



直売で元気に、 情報が育てた マーケティングの意識

パソコンはツール

私は今、海拔四百二十メートルの山の中で、ハーブを作りながら、できるだけ自給自足する生活を送っています。農業の情報化で有名になった「内子フレッシュパークからり」企画情報部長でしたが、退職してから時間も経っていますから、からは更なる進化を遂げていますから、ある意味、昔話になるかもしれません。しかし、IT化は、農家を元気にし、地域が自立するための強い武器になると思っていますので、そんな思いを話させていただこうと思います。

私はUターンで内子町農協に勤めておりました。パソコンに興味を持ち、個人で趣味としてやっておりました。当時は少数派でした。そんな中で、農業で地域を活性化しようという肱川流域グリーントピア事業が始まり、流域の農家がパソコン通信で情報をやり取りする「ひばり



元フレッシュパークからり企画情報部長

森 本 純 一





ネット」が稼働し、私たちはそのホスト局を立ち上げました。パソコン教室を開いて流域の農家に学んでもらったのですが、累計では六百人にもなりました。一九九一年のことです。当時は、パソコンが道具であるという発想はありませんでしたので、私は「何をするのか」という目的意識こそが大事で、パソコンはツールに過ぎないと力説していたように思います。そんなことがきっかけで内子では、農業ＩＴ化が始まりました。九三年には農業情報ネットワーク全国大会を内子町が誘致しました。こうしたＩＴ化への取り組みの中から情報化に対して熱

心な農家が育ち、全国大会やひばりネットでの議論から生まれた構想が農産物直売所です。七十人ほどの農家が集まり、小さな小さな直販所ができます。これ以後にからりとなる「内の子市場」です。九四年七月のことです。

マーケティングが農家を変えた

農産物を自分で売る直販所は、今まで自分で物売ったことがない農家の人たちが、自分で値段をつけて売ったことから、農家にマーケティングという意識を熟成させたと思います。「からり」では農産物すべてに、バーコードを付けて管理しています。事務所で農家は値段を端末機に打ち込むと、バーコードや値段、生産者名が印刷されたシールが出てきますので、農家は自分で農産物に貼り付けます。後ろから見ていると、みんな譲り合って、前の人がどんな値段を付けるか見てから自分の値段を付けたがるんです。前の人の持ち込んだ農産物と、自分の農産物を見比べて、前の人が二百円の値段を付けると、自分の農産物に自信があれば二百五十円という高い値段にし、なければ百八十円と安くするんです。安くしても売れないのではないかと自信がないときは、離れた場所に自分の農産物を置いたり、出荷する日を変えたりする



んです。それでも自信がなかったら、アイテムそのものを変えます。農産物をそのまま売るのはなく、加工食品にするとか工夫するようになるんです。競争の中で商品を考え、つくりだす。そんな農家同士のやり取りがとても興味深いものに私には感じられました。

負けてなるものかという思いも生まれ、元気の源にもなったような気がします。同じ商品を出しているおばあちゃんが二人いて、片方のおばあちゃんが病院に入院したと聞いたとします。もうひと



りのおばあちゃんは「それは大変ね」と言いながらにこにこ笑って、次の日は倍の商品を持ってきます。一人勝ちできるんですから。これはもうマーケティング理論の実践です。売り場の方は、仕入れ業者が一軒つぶれても、二軒目が補ってくれ、穴はあきません。しかも、入院したおばあちゃんも気が気ではありませんから、早く復帰をするために、頑張って病気を治します。

残酷な情報も人を育てる

直売をするということは、農家がマーケティングに参加するということです。本当にいい物というのは値段に関係なく売れるということを発見した農家は、もの凄いい力をつけたと思います。それを直売所で見つけたんです。生の声が聞こえ、ふれ合いがあつて、美味しかったよと言われる。そうすれば「ありがとうございます」と言えますよね。

これはもう凄い励みです。売り場の情報が、心情に直接入ってきます。しかし、残酷な面もあります。少しも売れてないという情報が入ってくると悲しく、売れ残った品物を持って帰ると、悔しさも生まれます。しかし、この悔しさこそが、明日は売り切つてやるぞという決意にもつながっていくのです。

でも正直言って、そこまで考えてバーコードのシステムをつくつたものではありません。マーケティングという未経験の領域に農家の人たちが入つていったことで、負けないように頑張ろう、売り切るように頑張ろうという気持ちになり、さまざま工夫



をしてくれたんです。そして、工夫をする、「からり」のシステムの方にも不具合が出てきたり、これがあつたらいいのにと要望も出てくるので、それを改善していったんです。「からり」では、出荷する農家が成長していくことで、同じようにシステムも成長していくという流れができてきたことが、ここまでうまくいった理由だと今では思っています。

ホームページ

<http://www.dokidoki.ne.jp/home2/ufufu/>

オンリーワンの地域づくり、 かけがえのない 地域資源を活かす！

自分のふるさとを語りたい

私がまだ青年のころ、東京でふるさとはどこかと聞かれました。「双海町です。松山の近くです」と説明すると、「ああ、埼玉ですか」と言われました。それで、愛媛県、道後温泉、その二十五キロ西、瀬戸内海に面して……と、枕言葉を並べていって、やっとわかつてもらえるのです。これが私がふるさととは何かを考えるようになったキッカケです。子どもの担任の先生から「若松さん、あなたの町の子供たちは自分の町を語れませんか」と言われたのもショックでした。「伊予市の向こうにあります」と言うのだそうです。私が東京で自分の町を語れなかったのと同じように、子供たちも自分のふるさとを語れないのです。

自宅横に私設公民館「煙会所」をつくりました。ここで青年の話を聞くと、仕事がない、活気がない、文化がない、嫁さんが来ない、プライバシーがない、遊



元双海町教育長

若松 進一

び場がない、いい店がない、狭い道しかない、情報は古くて遅い、信号が三つしかないと嘆きます。自分たちの町を卑下するんです。これを「田舎嘆きの十力条」と私は名付けました。こんな若者では町づくりができるはずがありません。

夕日は私のDNA

そんな時でした。「明るい農村」の取材に、東京からNHKの職員がやって来ました。ひと駅乗り越したというので、彼らを下灘駅まで迎えに行ったんです。すると、彼らは西瀬戸に沈む夕日を見て待っていました。そして、「こんなきれいな夕日は見たことない、すごいですね」と驚いているのです。この瞬間、自分の

中にあった夕日という潜在能力が顕在化していきました。なんせ、ずっと下灘に沈む美しい夕日を見て育ってきたんですからね。二〇〇一年、ハワイ沖で沈没した「えひめ丸」は四代目です。私は宇和島水産高校の卒業生で、初代のえひめ丸の甲板で見た南太平洋の夕日の



美しさも思い出しました。青年団時代、私は青年の船でアメリカに渡りました。太平洋上での夕日もこれまたすごかったです。そんな思い出が沸々とわき出てきます。どうやら、夕日は私のDNAみたいです。

「煙会所」で青年たちと、夕日で何かできないかと話し合いが始まりました。まとまったアイデアは、日本で海に最も近く、寅さんもロケにきた下灘駅での「夕焼けコンサート」。JRになんとか認めてもらい、六月三十日に第一回を開催したんです。幸運なことに続いていた雨が止み、当日は立派な夕日が落ちました。駅は千人以上の観客で埋まりました。

それからです。夕日の町が定着し始めたのは。それで、人と人が交流する

場所をつくろうとシーサイド公園を計画しました。町の年間予算規模を超える大事業です。町議会でも問題になりました。「赤字になったらどうするんだ」と町議が厳しく質問しますから、「赤字になりましたら、決算書は黒のボールペンで書かせていただきます」と答弁したんです。凄く怒られましたね。でも、百人が百人賛成することをしてもらいます。成功にはならないと思います。



感動商法で売り出した双海町

お墓参り以外は人が来ないと言われた双海町ですが、今では年間五十五万人の人が来るようになりました。シーサイド公園名物のおばちゃんたちのじゃこ天も最初は売れませんでした。それでも、「本物をつくり、真心を売ろうよ」「ここに来ないと食べられないものを売ろう」と繰り返し話ししました。そんな苦労の中で、じゃこ天を串に刺すことを思いつき、若者が右手にビール、左手にじゃこ天、そ

して歩きながら食べるというストーリーをつくったんです。これは売れました。

私たちは感動商法です。

と以外考えてはいません。

JR予讃線の

土手をきれいにしようと思ったときのことです。雑草が生い茂るより、花が咲き乱れている方がいいに決まっています。菜の花を植えようと思ったんです。ところが、JRは「線路のそばに草花を植えるのはいいかん」。「では、自然に生えた野良生えはどうか」と聞くと、「野良生えまで刈れとはいいません」と言う。それで、ポケットに穴を開けて菜の花の種を落としながら歩いたんです。種をまいてはいません。自然にポケットから種が落ち、野良生えで、線路沿いにきれいな菜の花が咲いただけなんです。

観光イチゴ園に取り組んだ農家も、夕日のまちづくりがキッカで、自分たちの地域資源に目覚めたのではないかと思います。イチゴ園の近くに翠小学校という、現役では県内で一番古い木造校舎が



不変のキーワード

あります。これからの時代に伝えていかなければいけない大切な原風景だと話をし、保存を働きかけました。この地域は二十年間にわたる住民の運動で、ホテルが飛び交っています。ホテル、伝統ある木造校舎、そして、イチゴ、地域資源をどのように活かしていったらいいかというヒントは、このあたりにあるようです。

今、私は瀬戸内海が見える山の上に人間牧場をつくっています。核になるのは「水平線の家」です。ここから見えるのは海と空だけ。海と空の牧場の中で、心という牛や羊を放し飼いにするのです。私たちがやるべきことは、地域資源を使っ



て、どんな楽しいことをすればいいか考えることです。振り返ると、私はまちおこしを、「楽しいことをしようよ」「新しいことしようよ」「地域を美しくしようよ」という三つのキーワードでやってきたように思います。そして、これからも変えずにやっていこうと思っています。

ホームページ

<http://www.yuuchi.jp/>





【トークバトル】

「地域の自立とはなにか!」

東谷 望史氏 (高知県馬路村)
 横石 知二氏 (徳島県上勝町)
 若松 進一氏 (愛媛県双海町)
 森本 純一氏 (愛媛県内子町)

成功の鍵は 仕組みづくり

森本 ミニトークで、みなさんは「地域づくりは、人を動かすシステムづくりが不可欠」と話されたように思います。ここから第二部を始めたいと思います。

横石 高齢者はデーターサービスに行くより、仕事をしたい。おばあちゃんの出番があるから、家族の中でも尊敬され、家族関係もうまくいく。することがあるから、朝起きても腰がしゃんと伸びる。いろいろのシステムとは、高齢者に出番を作るシステムです。

東谷 システム変更は大変です。農協では休みを変えるだけでもおおごとでした。馬路村では子や孫が高知市や安芸市に住んでいる人が多いので、収穫を手伝いに帰って来やすいように日曜集荷、水曜休みにしましたが好評です。昨年から集荷が始まると終わるまでは無休にした。ユズを搾

る効率が良くなっただけでなく、品質も向上したように思います。また、「ゆずの森」が稼働したら交代で日曜祝日も来客者のために開店します。お客さんのニーズに合わせるのは当然と思うけど、グジグジ言ってきた職員もいる。でも、やります。

若松 私を取り組んだのは町づくりに燃える人をつくる仕組みづくり。人を育てるには感動させること

です。小さい町から遠くの大きな世界に出かけたら感動するだろうと、費用は全額出す、レポートもいらんから海外に行つてこいと若者たち呼びかけた。二百万円の予算で、二人の青年をアメリカに派遣しました。ところが、感動したんでしうね。レポートを書いてきたので、冊子にして千部刷つてやつたら、町中に配つてアメリカのことを話し始めた。大成功と思いました。二十年間続けました。それが私の仕組みづくりです。ところが今、借金コンクリートの地域づくりをする町はあつても、若者を育てることに金をかける町は少なくなつた。

「夕日のまちづくり」も当時の大人から見ると非常識なものだったかもしれないが、今では常識になりました。非常識も成功したら常識です。馬路のユズも、上勝の葉っぱも、始めたころは、非常識だったんです。言い換えると、みんなウソつき。ウソを物語にしていく過程が情報戦略です。情報戦略が小さな町の小さな非常識を世界のオンラインワに育てた。うちの夕日のほうが、



葉っぱやユズより、ましなウソをついています。

横石 うそつきではないよね。(笑)

情報と言え、情報を共有化するための仕組みも大切だと感じています。この仕組みが上勝にはあるから、町に一体感があり、住民がひとつになれるのではないのでしょうか。

私がここで話をしていることは、上勝のおばあちゃんたちはみんな知っています。来る前にいろいろのパソコンに「愛媛でこんな会に参加します。報告を楽しみにしてね」と入力してきました。おばあちゃんたちは自宅にある高齢者用パソコンで、私が愛媛へ行つて、何をしているか知っていますから、私が留守でも安心して葉っぱを集めています。馬路村はデザインと演出がものすごくうまいですね。うらやましい。喉から手が出るほど欲しいのに、上勝に思いを寄せるデザイナーと出会っていないんです。

東谷 横石さん、それはちょっと違う。馬路は優れたデザイナーを連れてきたわけではありません。村を本当に知る優秀なデザイナーを育て

たんです。デザイナーも、私たちと一緒に仕事をしながら成長した。初めからいい人に出会ったわけではない。

横石 わかりました、頑張つて育てます。もうひとつ、とても大切だと思うのは競争と評価の仕組みです。いろいろのおばあちゃんたちが、パソコンに向かうと、はじめに画面に出てくるのは、葉っぱの今月の出荷額と、それが参加している人の中では何番目かという自分の順位です。これを見るのが面白くて仕方がない。この順位にすぐこだわります。「あの人だけには負けたくない」「あと〇〇円売れば順位があがるはずだ」とね。闘争心を燃やしている。モチベーションを上げるには仲よ



東谷望史氏

しクラブではダメです。互いに競争してこそ、レベルはあがります。農村にありがちな「まあええわ」「このくらいでええわ」では、レベルが上がリません。

教育がまちを変える

若松 コップを磨くには、内磨きと外磨きがあります。中を磨くのは自分たちで出来ますが、まちづくりは外のゴミをどう取るかが課題です。つまり、外の人に気づかせてもらうんです。「あんたの町汚いよ」と言われて、初めて自分の町の汚なさに気がつく。夕日も「きれいだよ」と言われて気がつきました。全国の素晴らしいまちづくりをしている所は、この部分が教育としてやられています。それは無意識の中の意識で、結局は教育の力です。

横石 上勝のおばあちゃんたちは六十歳よりも八十歳になつてのほうが感性が豊かです。感性が磨かれている。情報の渦が、自分の周りに巻いてくるようになると感性が磨かれます。鳴門の渦が巻くように、



自分にいろいろな情報が入り、出会いがあつてこそ磨かれますね。いつも日常の繰り返しだけで終わつていると磨かれません。商店主は自分で商売をしています。それなのに夕方になって、ビール飲みながら、「今日も商売あかんかったな」ではいけません。

東谷 私も感性や直感は大切だと思う。いかに早く頭の中で整理をして、自分に必要な情報を自分のものにするかです。これは日頃から問題意識を持つてないといけない。さらに価値観は常に変化をしています。今は同じ感性では十年通用しない。これを考えておくことも重要です。

地域づくりの到達点

若松 三人にお聞きしたいのですが、どこまで到達したいのですか。馬路村は三十億円の売り上げまでいったが、屏風は大きい方が倒れやすい。地域づくりに天井はあるのですか。

東谷 私にもわかりません。三十億は通過点です。五十億はそう遠くは

ないと思います。中山間地で手を組むことも大切と思い、窪川町と組んで馬路スタイルのユズづくりも始めてもらいましたが、お客さんの望むものは、馬路村のユズからできた商品ということもわかっていきます。しかしながら、土地のない村だから仲間を持つことも理解してほしい。それとあわせて、かつて田畑に杉を植えました。今度は杉を切り、ユズを植えます。しかも、ユズだけでなく広葉樹や雑木などをうまく配置して、新しいタイプのユズ園をつくりたいと思っています。工場ではなく、このユズ園を見に人が来るようにしたい。生産・加工・販売、そして観光とすべての仕組みができあがります。



森本純一氏



横石 葉っぱは他からは買いませ

ん。いろいろは販売価格の5%を手
数料として受け取っていますから、
百五十円で他から仕入れて三百円
で売れば儲けはそちらが大きい。で
も、第三セクターは地域のために存
在しているのですから、そんなこと
はできません。住民のためという理
念は壊したくないと思うからです。
最終目標は、町で後継者を育てつ
つ二千人の町を維持していただくで
す。そのためには攻め続けなければ
いけない。地域に住んでよかったと
いう存在感、家族と一緒に何かがで
きる喜びを大切にしたい。これがで
きるような地域産業にした
い。

森本 何にでも適正規模が
あると思う。販売額を大き
くするために規模をむやみ
に大きくしていつては無理
が生じると思う。販売額を
大きくしたいのなら、適正
規模のものを一つ、二つ、
三つと増やしていく方がいい
と思います。

合併が地域に もたらすもの

若松 今、地域の自立の前には、行
政の大合併という現実があります。
合併は地域にとって大問題です。国
鉄やN.T.T.を見てもわかるように、
分社化が時代の流れなのに逆行し
ていないでしょうか。金がないから
と住民へ負担を押しつけ、小さな自
治体が大きくなり、その大きな自治
体の中では中央集権が進んでいく。
これは自立とは違います。上勝や馬
路はそんな流れをいかくぐって合
併はしていませんね。

横石 今すぐ合併はすべきでない
というのが、議会や住民のほとんど
の意見です。大きくなると自分の出
番が少なくなり、自分の存在感が希
薄になり、人の「気」が切れてしま
う。例えば、合併すれば学校統合が
進みますが、地域から学校がなくな
ることで、地域の人にとってどれだ
けの「気」が切れるか。そうすると、
頑張つて働いていたおじいちゃん、
おばあちゃんも、送り迎え付きの
デューサービスのお世話になる。悪い



若松進一氏

歯車が回りだします。四国でも、五
年後、十年後には町が荒れ、村がな
くなくなると思います。格差は拡大し続
け、消滅は進行していくでしょう。
そうになると、もう一度大きな合併の
動きが出ると思いますが、それまで
に上勝は地域の力を強くし、強い組
織になって対応しようと、今、町中
で考えています。

東谷 行政の合併が進みましたが、
大きくなることだけがいいことで
はないと思います。また小さいこと
が要求される時代が来る気がしま
す。これから「村」に間違いなく価
値が出てきます。今、私たちは「ゆ
ずの森」加工場の周辺に雑木を植え
ています。お客さんには少し離れた
駐車場に車を駐めてもらい、雑木林

価値観と場を 組み立てる

の木陰を歩いて玄関まで来てもらおうと思っています。公共事業で整備した公園は、どれもパツとしませんね。感動するものがない。北海道のニングルテラスも黒川温泉のまちづくりも、いずれも公共事業に頼らずに手づくりでやってきたから味があるんじゃないでしょうか。

横石 テレビに出ると「うちの裏山の葉っぱを売ってくれ」と電話がかかってくる。いろいろは、葉っぱを売っているのではないんです。葉っぱが売れる場面を作って売っているのです。愛媛で講演などする



横石知二氏

と「ミカンが売れない」という愚痴をよく聞きますが、私は「ミカンが売れる場面づくりをなさっているか」と聞き返します。例えば、会議でペットボトルのお茶が出て、ミカンが配られることはいいですね。

果汁で手が濡れ、資料は汚れるし、剥いた皮は捨てるのができず机の上。でも水分に強い袋に手を拭く濡れテッシュと共にミカンが入っているというアイデアはどうでしょう。食べた後にテッシュで手を拭いて、テッシュと皮は袋に入れて、会議終了後はゴミ箱にポンと捨てて帰る。そんな場面を作ったらどうでしょうか。場を売ることがポイントだと思っています。

若松 六十五歳以上の高齢化率が五十%を超えると集落は機能を維持できないと言います。森本さん、



限界集落の最前線はいかがですか。
森本 海抜四百二十メートルにある約四十人の集落で暮らしています。プライドとして、誰にも気づかれずお年寄りが死んでいたということだけはないうにしたい。だから、水戸黄門の間に、灯りが消えていたら注意します。道の草を刈るなど生活環境の整備は後継者がいないとできません。地域が自立するということは、仕事をきちんとすれば家族と暮らしているだけの経済的基盤が維持できるということです。私も出来る限り、山に張りついて生きていきます。

清水 すごくバトルでした。若松さんのハーモニカで仲良く閉じたいと思います。本日はありがとうございました。

地域自立への処方箋

「四人のアントレプレナーから見えてきたもの」

朝日新聞松山総局 砂場 隆浩



人工海浜を掃除する若松進一さん。一番簡単な地域づくりは掃除と若松さんは教育長を退職するまで12年、出勤前の日課だった＝伊予市の双海シーサイド公園で

た。昨年七月には根拠法である国土総合開発法が国土形成計画法になり、制度改革の理念として新たに「地域の自立的発展」が掲げられた。国が地方を庇護してきた時代は終わり、好むと好まざるとに関わらず、「地域の自立」は進まなければならぬ道と

なった。

「地域の自立」が叫ばれて久しい。地域が独自性を発揮し、輝くことは確かにすばらしい。しかし、地域の自立は、地域の立場からだけ主張されているものではない。国は、「国土の均衡ある発展」を掲げて国土開発を進めてきた。その柱になったのが「全国総合開発計画（全総）」だ。地方の隅々まで同じように社会基盤を整備しようとして三全総で三百七十兆円、四全総で千兆円の投資がなされた。ところが、二〇〇五年末で国債残高が約五百四十二兆円にもなる財政赤字のため、「国土の均衡ある発展」という理念を放棄せざるを得なくなっ

三位一体の改革が進められているが、地方財政を支えてきた地方交付金が大きく削減される一方、財源移譲は進んでいない。しかも、地方税の課税対象である企業の本店や所得者の少ない地方は、大都市圏に比べて、税収が少なくなる傾向が強くなり、地方の財政は厳しさを増すばかりだ。地方自治体の運営も、国による許認可で雁字搦めに縛られてきた。地方自治体の首長や職員は、国が示すスキームの中から自分たちに適したのを見つけ、うまく申請し、資金を地方に環流させ、道

路や施設を建設することが優秀さの証明だった。国から独立して、自由に立案し、自ら資金を調達した経験には乏しい。急に自立を求められて、困惑している地方も少なくないのではないか。

そんな思いの中で私は、（財）えひめ地域政策研究センターが今年二月、松山市で開いた研究サロン「地域の自立とはなにか」でパネリストを務めた若松進一さん、森本純一さん、東谷望史さん、横石知二さん取材した。朝日新聞愛媛版に「地域の自立をめざして」（<http://mytown.asahi.com/ehime/newslist.php?id=3900014>）として連載したが、人口が減少し、高齢化が進む小さな地域を率いたアントレプレナー（起業家）の歩みは、地域が自立するための示唆に実に富んでいた。

「地域の自立とは、地域が経済的に自立すること」と四人は口をそろえ、「地域に住んで、食べていけるだけの経済基盤を確立することだ」と言い切る。確かに、どんなに理念が高かろうと、豊かな自然や長い歴史があろうとも、その地域で食べてくことができれば、住民は地域を捨てるしか





馬路村農協のコールセンター。直販は消費者と直接対話できるのが魅力だが、馬路村農協ほど効果的に使っている組織は珍しい＝高知県馬路村で

ない。では四人は何をしたのか。

IT産業を誘致したわけでもなければ、新しい産業を創造したわけでもない。地元にあった地域資源を育て、経済基盤を確立していったのだ。柚子も、からりに並ぶ農産物も、その地でなければ採れないという名産ではない。夕日や葉っぱに至っては、どこにでもある。しかし、そのまま売ったわけではない。東谷さんは柚子そのものではなく、「ぼん酢しようゆ」「柚子飲料」という柚子加工品で勝負した。農業の二次産業化だ。森本さんは自宅から販売量を知り得るシステムを構築することで農家を「つくる人」から「売る人」へと変化させた。農家の三次産業化をしたのだ。横石さんは、だれも売りものではないと思っていた葉っぱをニュービジネスに仕上げたが、何もないところからの思い

つきではなく、笹の葉のツマづくりという伝統産業がベースにあった。若松さんも夕日をキーワードにじゃこ天、ちくわという鮮魚の加工品をヒットさせたが、やはり瀬戸内海に面した漁村という地の利に立脚していた。よそから移植するのではなく、その地にある柚子、葉っぱ、農産物、夕日という地域資源を見つけ、そ



「まるで日本庭園のようでしょう」と話す横石知二さん。高齢者が収穫まで何年もかかる樹種を植えるのも地域に一体感があるからだろう＝徳島県上勝町で

れぞれの物語をつくり、一点突破で全面展開を図ったといえよう。

そして、地域を丸ごと商品化する販売戦略で、地域経済を成長させていることも共通している。ゴミゼロの上勝町の葉っぱだからこそ、ゆつくり時ながれる馬路村の柚子だからこそ、すべてが夕日というキーワードに結実させた双海町だからこそ売れたのだ。柚子や葉っぱ、夕日はどこにでもあるが、馬路の柚子、上勝の葉っぱ、双海の夕焼けとなると固有性が生まれる。そのために、地域の環境整備、住民で情報を共有するシステムの構築、地域を日本の原風景として売り込むイメージPRなど様々な方策が採られて

いるが、固有性を育てるという根は共通しているように思える。

さらには、地域の高齢者を戦力の中心に据えたことも同じだ。今でこそ、葉っぱで年収一千万円、じゃこ天の年商五千五百万円と胸を張れるが、売れない時代もあった。乗り切れたのは四人を信じ続けた高齢者の存在があったればこそ。四人の地域を訪れて思うのは、おばあちゃんたちの笑顔の素晴らしいこと。高齢化が進んだ地域が駄目なのではない。高齢化が進んだと嘆く地域が駄目なのだ。長寿を喜び、尊敬を持つて共に歩む上勝や内子では、高齢者がパソコンを駆使して情報を収集し、自ら販売戦略を立てている。サービスで福祉施設に通う高齢者よりも、若者と共に働く高齢者は楽しそうで、そして、輝いて見えた。



昨年暮れに開いたプレサロン。「外から人が来る地域を目指せ」「交通の便もことん悪いと魅力になる」など熱く意見を交わした。左端は筆者＝高知県馬路村で

地域課題研究サロンの閉会后、インターネット掲示板「トークバトル放課後サロン」に参加された皆さんから感想やご意見をいただきました。そのなかからいくつか本誌に取りあげ紹介します。書き込まれた皆さん、大変ありがとうございました。



◎研修会に参加して 投稿者：岩井仁茂 投稿日：3月1日(水)

何れの方も、ナメクジが錨を下ろした様な人達に夢と希望を説き、意識を植え付けた、紛れもなくその人々の「心に火を点けた」粘り強い継続した情熱には敬服致しました。そして、皆さん大変なロマンチストですね。また、素晴らしい感性の持ち主です。感性は先天的なものだけでなく、気づかせ、磨かれるもの、と若松さんの発言にあったと思いますが、全く同感です。では如何に自分の感性を磨くか？、やはり感性を持っている多くの人と交わり、多種多様な感性に触れてみる事により培われる事も可能であると思います。

そして、皆さんに共通して感じる事に非常に「バランス感覚」に優れていることです。これは、リーダーとして成功する大切な条件であると思うからです。こんなカリスマ性のあるリーダーの後継者は大変ですね。思うに、これは能力とは別に「イメージ」が占める要素が大きいかと思います。さて、この日は、さしづめ「プロジェクトX」の総集編を見た感を持ち、元気をもらい会場を気持ちよく後にしました。

◎好きであるということ 投稿者：あじまる@朝フルの会 投稿日：3月1日(水)

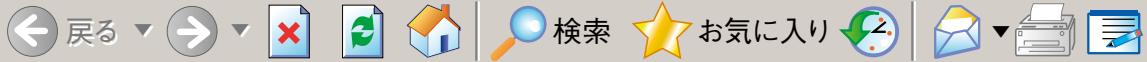
こういう会で睡魔に襲われなかったのは今回が初めてでした(汗)。参加して一つだけひっかかっている言葉があります。「感性」です。支配人さんが締めくくりに「プロモーションビデオの中で流れていた音楽を聴き分けられることが感性ではないか」という問題提起をされていました。偶然私は「あ、運命だ」などと思いながら見てました。数日間、サロンのメモ書きを読み返し、いくつかの討論の場面を思い出しながら、それを咀嚼し反芻するうちに、一つの命題を思い立ちました。「好きであるということが感性を磨くことにつながる」という命題です。講師として参加された方々は、異口同音に地域に対す愛着を持たれ、地域を何とかしたいという熱意を常にもたれています。そういう愛情や熱意がそれぞれの「感性」を育てたのではないのでしょうか。私はまず「好き」から始めてみようと思っています。みかんを愛し、みかんの木を愛し、みかんを育てる風土を愛し、そしてみかんに携わるすべての人を愛することから。

◎まずは、一步踏み出すこと。 投稿者：日銭労務士参上 投稿日：3月1日(水)

実践での4名のお話。よくある学識経験者や〇〇研究所主催とは異なり、それぞれ知った仲での雰囲気、進行、又極めて具体的なお話、特に売るためになすべきこと。横石さんの発言にあった、人の意識を変える努力。頭が下がると同時に、わが身に振り返ってみて。とにかく、まず、自分が地域で何かをやってみる。自分が動くことから始まることを実感です。

◎今ごろ放送中ですね！ 投稿者：横山 史 投稿日：3月21日(火)

家にはCATVが入っていないので見られませんが、私にとっては4名のパネラーはもちろんです。一緒にお越しになっていた方ともお話できたのが良かったです。例えば馬路村の若い方などは「こんなに楽しい仕事はない」と口を揃えて話されていたのが印象的でした。



タイトル

トークバトル放課後サロン

◎気づき 投稿者：Rias 投稿日：2月26日(日)

個性の活躍する場所場面を創り、影響しあった結果をそれぞれの経験談でお話していただき、時には具体的なノウハウも漏らしていただきました。地域は個人の集まりだから、そこに住む個人それぞれが自立しなければ地域の自立はない。そのための数多くのヒントを学ぶことができました。ありがとうございました。

◎地域の自立 投稿者：馬路の山猿 木下 投稿日：2月28日(火)

個々の考え方によって自立への受け止め方は違うと思います。結局、地域づくりは人づくりだと思いますから、自分が感じて動くしかないのが答えだと思いました。いろいろ議論がありますが、その地域を本当に好きな人が多いほどその地域は、自立できると思います。地域づくりは相手をあてにすると、相手がこないときは腹が立ちます。でも自分が好きでやっていると感じたら腹はたちません。コツコツ地道ですが頑張るしかないと思います。基本的にその地域に来るお客さんは、その地域の生活文化を見に来てるとおもいます。お客さんお客さんではなく、50:50の関係をいかに作れるかが鍵のようにも思います。またそんな方に訪れてもらいたいですね。10年後20年後にむけての取り組みをやっていく上で、そのヒントとして色々聞けてよかったです。後は地域に置き換えてやりがい、自立につながるやり方をもっと考えてみないといけなと感じました。人は理屈でなく心で動きますからね・・・けど収入もちょっとあったらいいですね・・・

地域づくりに答えはないですもんね。

◎「自立とは何か」に参加して 投稿者：大河内 結子 投稿日：2月28日(火)

私はみかん農家の主婦です。「みかんは安い安い」と言われ続けて久しい。安くてもしんどくても半分は仕方なく続けていたものです。そんな時、全国に女性起業家の話題を耳にするようになってきました。葉っぱで1億円・・・ごっくんジュース・・・からりの産直・・・夕日が日本一・・・。私にとってあこがれの夢のような待ちに待った日を迎え、参加できたことに感激と感謝以外に言葉がありません。「自立」立場によって大変かなとおもうことがあります。でも、周りに振り回される事無く、自分の意志でどうするかをきめること。そして、私はいつの時も楽しみながら輝いていたいものと思っています。

4人の方のバトル本当に楽しかった！たくさんの成功、失敗をもっともっと聞きたいです。

◎勉強になったケーススタディー 投稿者：鎌田 秋吉 投稿日：3月1日(水)

4人の講師の話で一番参考になったのは、やはりケーススタディーです、具体的には物づくりでもソフト造りでも、たくさんの壁があることを痛感しました、目標を決めたらいかに困難が伴おうとも達成に向かい邁進すること、それも”へこたれず笑顔”で貫くことができるかだと思います。しかし、我々は「身の丈にあい長く継続できる地域づくりが大切」と思っています。答えは一つではなく無数にあると確信しています。

とうほく街道会議 誕生！

東北からこんにちは！ 私の住む仙台市は、江戸日本橋から福島を通り青森県津軽半島まで続く日本一長い奥州街道のほぼ中間に位置しています。東北には、奥州街道の他にもたくさんの街道があり、私はそういう地域で生活していたにもかかわらず、これまで街道にはあまり関心を持たずにいました。そんな私が街道に関わることになったきっかけは、平成十六年十月に開催された「全国街道交流会議第三回全国大会」でした。この大会は、斎藤茂吉のふるさとであり、温泉でも有名な山形県上山市の「上山まちづくり塾」の皆さんが、羽州街道や今も受け継がれている檜下宿をはじめとする宿場の魅力をまちづくりに活かそうと誘致をはかり、実現にこぎつけました。このとき、私は、上山を度々訪問して、議論の輪の中に入れていただいたことで、すっかり街道に魅せられてしまいました。

全国大会当日は、各地で街道をテーマに地域づくりを実践している八百名の方が集まり、すごい熱気で盛り上がり、皆さんのパワフルな活動に大いに刺激を受けました。このとき、様々な地域の人達が、街道を題材にして集まり交流することはとても意義のあることだと実感したので

す。大会の最後に、出席者の中から「ぜひ、東北各地で街道を活用して地域づくりに取り組んでいる個人や団体が交流を深め、連携するためにプラットフォームの機能を備えた組織を作ろう」という声が上がりました。その後、たくさんの熱心な人達が検討を重ね、平成十七年三月に「とうほく街道会議」が誕生しました。

同年十一月には、「菅江真澄の足跡から新たな街道の歴史を紡ぐ」をテーマに秋田市に於いて総会と交流会を開催しました。初めての取り組みではありましたが、全国から三百六十名の方にご参加いただき、二日間にわたり基調講演、街道談義、街道探訪会を開催しました。

街道というフィルターを透すと景色も変わる

「とうほく街道会議」の事務局を担当することになった私は、とにかく早く街道のことを勉強しなければ・・・と必死でした。図書館に通い街道に係わる本を探したり、インターネットを利用して情報収集をしたりの日々。また、街道に出向き、実際に歩いたり地元の方から街道の歴史を教えていただいたりしました。そうしてみると不思議なことに、街道というフィルターを透した途端に、普段見慣れた景色がちよっと違って見えたり、昔の人の行き交う姿が浮かんでくるような気がしたのです。特に、東北の二大街道である奥州街道と羽州街道が分岐する福島県桑折町を訪れ、その分岐点に立った時、このふたつの道の先にはどんな街があり、そこで人々はどんな暮らしをしていたのだろうか、そう思うと何かジーンと胸が熱くなりました。きっと、古くからここを

街道から地域を考える

心の桃源郷を求めて

とうほく街道会議
事務局長
島谷 留美子

とうほく街道会議 事務局
〒980-0021
仙台市青葉区中央2-9-1
河西ビル
（東北地域環境研究室内）
TEL 022-212-1105
FAX 022-212-1106

通る人は、私と同じように立ち止まり、道の向こうにつながる地域に思いを寄せ旅立って行ったに違いありません。

東北の街道を旅した先人たち

東北の街道を語る時、忘れてはならない人たちがいます。伊賀上野で生まれた松尾芭蕉は、元禄二年（一六八九）に江戸を出発、約五ヶ月間をかけて白河の関を越えて平泉、山寺、最上川、出羽三山、酒田から金沢、大垣まで旅をして「おくのほそ道」を著しました。菅江真澄は、天明三年（一七八三）に故郷三河を出発し、信濃から越後、湯沢に入り東北と北海道を歩き、その後秋田県内に約二十九年間滞在し「菅江真澄遊覧記」等を残しました。そして、英国ヨークシャー生まれのイザベラ・バード女史は、明治十一年（一八七八）に東京

を出発、日光、新潟、東北をめぐり、さらに北海道にわたり「日本奥地紀行」を著しました。その他、吉田松陰、古川古松軒等歴史に名を残した多くの人たちが東北を訪れ、風景や歴史、文化に接し、その素晴らしさを実感し、後世の我々に貴重な示唆を与えてくれ、私たちの自信につながっています。

心の桃源郷を求めて

かつて、街道は、地域と地域、人と人をつなぐうえで大きな役割を果たしてきました。

今も、往時をしのばせる貴重な財産として地域の人達から大切にされています。街道は、過去・現在・未来をつなぎ、さらに心と心をつなぐ「心の道」でもあります。街道をみると、ともすれば、単に人が

歩き、物を運ぶ道とだけ考えたりするものですが、忘れてならないことは、海路も空路も水路も線路も、電気・通信網に至るまで、つなぐ機能を備えたという意味では「現代の街道」と考えることができるのではないかと思います。

私は今、イザベラ・バードの「日本奥地紀行」を鞆に入れ、何度も何度も読み返しながら、バードとともに東北を歩いています。そして、新しい視点で東北の再発見をしてみたいと考えています。彼女は、山形県米沢盆地を訪れた時、あまりの美しさに、この地を「東洋のアルカディア（桃源郷）」と讃えました。東北には、この米沢をはじめとして魅力に溢れたいくつもの素晴らしい地域があります。

皆さん、東北の街道を歩いて、自分にとっての桃源郷を探してみませんか。



とうほく街道会議交流会・秋田大会
奥州街道と羽州街道の分岐点（福島県桑折町）



イザベラ・バードが眺めた蔵王



二井宿ハイク・吉田松陰の道を歩く



<http://www.tohoku-kaido.com/>

“MY TOWN” うおっちんで
歩キ**目**デス
 & **足**ラデス

Vol.36

「自立する像たち…
 旧大洲市の場合」

タウンツーリズム講座
 岡崎直司

今回のウォッチングは自立がテーマ。自分で立つ、フーム。その時、天から声が、「銅像を調べよ」と。そんなワケで、旧大洲市内にある学校の銅像探検に出かけた。何故大洲かというと、通常は「二宮金次郎」の銅像が通り相場だが、この街にはもう一つの、いや、他にも違う像が見られて興味深いノダ。

大洲地方のその方面の代表選手と言えば、やはり江戸初期の陽明学者中江藤樹。観光的には、今も大洲城跡にあるものが有名だが、天守閣の本造復元前は、まさにその場所にあり市民に親しまれた。しかし大洲では、教育的見地から市内の学校でもその像が見られたりする。かつて屋敷跡のあった大洲高校を始め、大洲小、喜多小、大成小などである。

中江藤樹（一六〇八〜四八）は、加藤家に付き従い、近江安曇川から米子へと移り、そして



平野小学校

十歳の時大洲へとやってくる。当初は祖父の任地である風早郡（今の北条柳原）で勉学に励み、四書五経の内「大学」を読み十一歳で立志。つまりこの少年は、小学校六年生くらいで早くも精神的に自立してしまった。十四歳で大洲に戻り、文武両道に励み、二十歳で門人たちに「大学」を教えている。二十七歳で思うところあって官を辞し、近江へ戻って以降は村人や門人に学問を教える。その教化は、熊沢蕃山や^{おの}岡山などの学者を生む。かくして日本で初めて陽明学が確立されてゆき、当時の幕藩体制下の主流朱子学に対することとなる。近江聖人と呼ばれ、四十一歳で没する。

さて、銅像で見てみよう。大洲・喜多・大成各小学校にある少年像は、まさに旅立ちの装いで、りりしく一歩足を踏み出し、清新の気に満ちている。いずれも昭和三十三年、八幡浜の彫塑家塩崎宇宙氏の製作。大洲小には、このほか室内に漆喰と銅錫製の二体があり、どちらも老

三善小学校



大洲小学校



大洲小学校



大洲高校



大成小学校





大洲城

大洲高校のものは、青年像で前述の何れとも異なり、青年期の座像、辞職願いの際の様子が表示されているとのこと。また校内には、昔日の屋敷を昭和十四年に再現した「至徳堂」と呼ばれる建物もある。

成した座像となっている。

一方、城山のものは、当初明治三十五年に建てられたが、現在のものは、戦後昭和二十七年、三度目の鑄造と伝わる。その像からは、「良知に至る」という考えを元に「知行合一」を唱えた、陽明学の祖最晩年の風格が漂っている。

さて、学校においてポピュラーな二宮金次郎（二七八七〜一八五六）の方はどうだろう。市内の八校に像があるという。平野・粟津・三善・新谷・柳沢・菅田・南久米・蔵川の各小学校である。この内、平野・新谷・菅田の三校が銅像で、後は全て陶製の金次郎である。今回の調査で興味深いことが分かった。蔵川小は、昭和十三年、三善小は同十五年、どちらも銅像で建てられたが、直ぐに戦時体制となり国に供出（戦備の資源）された。それで後に陶製の像が再建されている。従って、どうやら五体の陶製金次郎は戦前期のもの、三体の銅像は戦後のもの、ということに。新谷小は昭和三十三年、平野小は同三十七年に除幕式をしている。不思議なのはふくよかな三善小の陶製金次郎で、何と金色をしている。ハテ、名前にあやかっただか。

これらの像であるが、薪を背負い、本を読むという王道の金次郎スタイル。気になるのは、一体ナニを読んでいるのか、ということ。写真のごとく、キチンと漢文が刻まれており、「大学」の一節。因みに「一家仁一国興仁 一家讓一国興讓 一人貪戾一国作乱 其機如此」と書かれていて、「二家に仁愛の徳があれば国中にも仁愛が起こり、一家に謙讓の徳あれば国中にも徳が起こる。君主一人がデタラメなら国中が乱となり、理由はそんなところにある」というような修身の意味らしい。戦前、昭和初期には、日本中の学校にこの像が建てられてゆき、学校教育の象徴となるが、時代の波に翻弄されつつも、例えば蔵川小のように、地域を上げて昭和十二年から「尊徳祭」が毎年連綿と六十八回（昨年）も継続されている所もある。アップレ金次郎。

この他、大洲小・三善小には野口英世の像、久米小には郷土の偉人、国学者矢野玄道の石造などもある。いやはや旧大洲市は、自立する像たちでとてもにぎわっている地域である。

矢野玄道像



野口英世像（大洲小）



蔵川小学校



久米小学校



平野小学校



『人間牧場』～今、ここに心を解き放つ～

水平線に向かって放射状に収束するウッドデッキ。先端に立って体を乗り出してみるとわずかに潮の香りを含んだ風が体を通り抜けていく。足元には「ロケ風呂」と名づけられた五右衛門風呂が「ゆ」の暖簾を下げてたたずんでいる。竹で屋根を葺いたこだわりの「ロケ風呂」からは文字通り抜群のロケーションが約束される。左手奥に目をやれば、注目のツリーハウスが見える。設計を担当した息子さんの、家の中に木を通すという斬新なアイデアで「人間牧場」に相応しいツリーハウスに仕上がった。「ここは僕にとっての秘密基地。子どもの頃はここに本とハーモニカを持って遊びに来ていたんです」と牧場主の若松進一さん。時を越えて若松少年の夢を乗せた「人間牧場」に注目が集まっている。



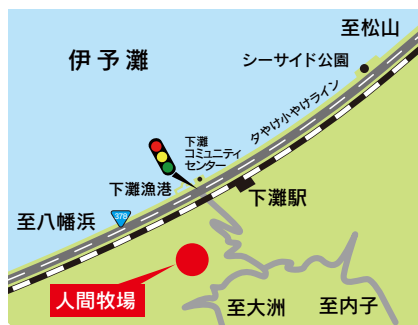
水平線の家



ロケ風呂



ツリーハウス



■問い合わせ

- 「人間牧場」は私設です。訪れる際には若松進一さんまでご連絡ください。
E-mail : wakamatsu@yuuhi.jp
- 若松進一さんのブログで情報発信中です。
ホームページ <http://yuuhi.jp/>

Book Information

【フィット・フォー・ライフ 健康長寿には「不滅の原則」があった！】

ハーヴィー・ダイヤモンド マリリン・ダイヤモンド著 松田麻美子訳・補遺
グスコ出版 2,100円(税別)



本書は朝フル健康運動のバイブルというべき有名な本。フィット・フォー・ライフとは生命の法則にフィットした生き方をすれば、生涯良い健康状態でいられるという意味である。健康は唯一健康的な生活からしか生まれぬ。食べ物はその人の生命の長さや質に多大な影響を与えており、私たちは本来の体の生理機能や構造上ふさわしいものからかけはなれた食べ方をしている。この本には、健康であり続けるための三つの原則が説かれ、その一つが「果物を正しく食べること」である。ページを開いた瞬間から、あなたは「健康」と「食べること」について今まで抱いてきたパラダイムの転換を求められるだろう。フルーツで朝食を！

Information

センターからのお知らせ

■平成 18 年度 まちづくり活動アシスト事業の助成団体決定

地域活性化を目的とした活動に幅広く助成する当事業ですが、今年も県内 14 団体（東予 7、中予 2、南予 5）から申請をいただきました。審査の結果、次の 4 団体に助成を決定しましたのでお知らせいたします。

●新居浜市『自然と緑と花の島創造事業』

大島地域の環境浄化・美化と、来島者との交流促進を目指す。

特定非営利活動法人 GOODWILL（代表 白石 徹）

●八幡浜市『酒蔵コミュニティ・ネットワーク事業』

酒蔵を活用した文化事業の開催と、それを通じた南予地域の活性化を目指す。

い〜コーディネータ NET 南予地域活性化委員会（代表 三田地みさと）

●上島町『島の食文化再生事業』

島の野草・海草の採取、分布図の作成、料理レシピの普及によって地域の食文化再生を目指す。

ゆげ女性塾（代表 松下 るみ子）

●大洲市『多目的憩いの場整備事業』

商業施設跡の空き店舗を地域の憩いの拠点として整備し、活用。

大杉塾（代表 西田 和子）

※ 各事業に関心がある方は、センターまでお問い合わせください。

えひめ地域づくり研究会議からのお知らせ

■「県土縦断リレーシンポジウム 2006」開催中！

今年度で 20 周年を迎える「えひめ地域づくり研究会議」では、ネットワークの再構築をメイン・テーマに「県土縦断リレーシンポジウム」を開催しております。未来の子どもたちへ胸張って残せる地域づくりを一緒に考えてみませんか？

●平成 18 年 6 月 17 日（土） 宇和島市総合福祉センター（宇和島市） — 終了 —

「この地域の進む道 - 生き残るための方策 -」

●平成 18 年 8 月 27 日（日） リーガロイヤルホテル新居浜 1F「菊の間」（新居浜市）

「笑顔で結ぶネットワークの再構築（仮）」

●平成 18 年 11 月 11 日（土） 四国霊場第 58 番札所「仙遊寺」（今治市玉川町）

「こどもから高齢者まで 未来の今治を創造しよう！（仮）」

●平成 18 年 11 月 26 日（日） 道後「宝蔵寺」（松山市）

「ネットワークの再構築・松山圏（仮）」

●平成 19 年 2 月 10 日（土） 20 周年記念シンポジウム in 内子座（喜多郡内子町）

ネットワークの再構築の総まとめ、研究会議の 20 周年の総括、問題点と将来への展望など。

※ 各シンポジウムのお申し込み・お問い合わせは、センター内事務局まで。

【スローフードな日本！】

島村菜津 著 新潮社 1,500 円（税別）

大量生産に大量流通、食のグローバル化の中で「味の均質化」はどんどん広がっている。スローフードとは何か？ キーワードは味の多様性である。いつでも、どこでも、同じでない味が息づいている世界。土地土地ごとに家庭ごとに違う、そんな味を大切にしようという運動である。その主役は、おいしいものを作り続けてくれる小さな生産者たち。今の食生活が、どれほど季節感や風土に根ざした味わいを失ってしまったか。あらゆる関係性の真ん中に食がある。お皿の外の視点を大切に、スローフードな食卓から世界を変えよう。日本に初めてスローフードを紹介した島村菜津さんの新著。





タイギンだ!

夏の、めでタイ大当たり!

1等前後賞合わせて

サマージャンボ3億円

1等2億円 前後賞各5千万円 2等1億円

2006年市町村振興宝くじ 7/13(木)発売

この宝くじの収益金は市町村の明るく住みよいまちづくりに使われます。

サマージャンボの宝くじの賞金は
1等・前後賞合わせて3億円。
1等2億円×42本 前後賞各5000万円 2等1億円×126本

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。
〒790-0003
松山市三番町四丁目十番地一
愛媛県三番町ビル二階
財えひめ地域政策研究センター
まちづくり活動部門
TEL089(932)7750
FAX089(932)7760
発行/平成十八年七月一日
財えひめ地域政策
研究センター
印刷/岡田印刷株式会社

カラコロ、カラコロ音がする。祖母がシノを織っている。シノは山に自生する萱のことで、これが浜の漁師のもとにいきイリコや海草を干す際のシートとして使われることは後で知った。中学二年の時、祖母がシノを織ったお金でギターを買ってくれた。五千円のガットギターであったが、これが私の楽器道楽の始まりだった。学生時代には食べるものを食べないで手に入れたりしながら、三十代半ばまでライブハウスに出ていた。それから仕事を理由に楽器から遠のいたが、生まれ育った家に入ると必ず想いが甦る。そう、後半生は「音のある人生をおくろう。カラコロ、カラコロと祖母がシノを織る音が、私の心の音である。山間の家に帰れば、家が笑い、ミカン山が笑う。」(清水)